

都市農業の持続的発展の可能性を探るⅡ

都市農業の持続的発展のための課題と展開方向〈2〉

農的 社会デザイン研究所代表
農林中金総合研究所客員研究員

葛 谷 栄 一

都市農業の生産機能

前回は、都市農業の実態と問題の概略、都市農業をめぐる経過と情勢について俯瞰した。3回にわたる本稿に与えられた課題は「都市農業の持続的発展」にあり、次回では一部事例もまじえながら、「持続的発展のための課題と展開方向」について考えてみたい。

都市農業の基本的な必要性、重要性については、都市農業の持つ機能に集約される。あわせてこれらを十全に発揮していくという視点から一定の課題を抽出することが可能であり、これらに法・制度の制定・見直し等の課題が加わることになる。

都市農業の機能は大きく、①農業生産そのものにかかわるものと、②農業生産にともなうて発揮される多面的機能に分かれる。

農業生産は食料供給、安全安心を提供するとともに、収穫された農産物の鮮度が大きな意味を持つ。一定量の食料が安定的に供給されることによつて食料安全保障が確保されるが、都市農業ではお米を中心とする穀物の生産はわずかであり、食料安全保障については日本農業全体で支えることが基本になる。むしろ都市農業での食料供給は緊急事態への当座の対応として重要な役割を發揮することになる。また安全安心は、農地が身近に存在するが故に消費者の目が常時注がれており、また農業

散布による近隣住宅への飛散を免れないことから自ずと農業使用には節度が求められることになる。こうした消極的な意味での農業使用抑制にとどまらず、消費者の中には無農薬、有機栽培を期待する者も少なくなく、さらなる環境にやさしい取組へとレベルアップさせていくことが課題となる。そして鮮度についてであるが、何よりも消費地の中で生産され身近にある直売所等で販売されることから鮮度は高い。冷蔵技術や運送の迅速化等によつて、農村からの「朝どり」の野菜等の供給は珍しくはないが、まさに「取り立て」のものを日常的に購入できるのは都市農業ならではといえる。逆にいえば都市農業では必要に応じて市場を利用することはあつても、極力、身近なところで供給・販売することによつて、その立地条件を生かすことが可能となる。

これに加えて消費者ニーズに対応した高度技術を活かしての花弁生産や摘取・収穫による観光農業、地域特性を生かしての果樹等特産物の生産・販売が位置づけられる。

このように都市農業を農業生産という面からみた場合、単なる食料供給というよりは、消費者ニーズを直接反映しながら、環境にやさしく安心をもたらす栽培方法によつて生産しながら緊急時の備蓄機能發揮に対応していくとともに、鮮度を生かしてできるだけ身近なところで販

売していくことが課題としてあげられることになる。

都市農業の持つ多面的機能

農業の持つ多面的機能については、日本学術会議による試算があり、そこでは洪水防止機能、水源涵養機能、土壌侵食(流出)防止機能、土砂崩壊防止機能、有機性廃棄物処理機能、気候緩和機能、保健休養・安らぎ機能に分けて貨幣評価が行われている。都市農業もこれら機能を大なり小なり有しているが、概して耕地面積は狭小であるとともに平地が主で、かつ水田が少ないことから、各機能の中では保健休養・安らぎ機能や気候緩和機能が突出しているといえることができる。

保健休養・安らぎ機能としては、都市農業による景観の保全が土と緑によるホッとできる、日に優しい空間を提供している。また保健休養・安らぎ機能とは若干異なるが、市民、学童が多い都市農業では、市民農園、体験農園、学童農園等による「農」の営み体験による教育機能がより発揮されているといえる。さらに気候緩和機能としては、土と緑、そして風の通り抜ける空間が、ヒートアイランド現象の緩和に極めて大きな役割を發揮しているといえることができる。

これらに加えて果樹や屋敷林等による騒音の遮断効果や、災害時の避難場所としてのオープンスペースの提供や水の確保等